

平成 27 年度

読書感想文コンクールを終えて

情報メディア教育センター運営委員会

本コンクールは今年で第40回を迎えることになりました。1年生200編、2年生171編、3年生7編と合計378編の応募がありました。昨年度より20編増えたことを喜ばしく思います。情報メディア教育センター運営委員会の教員7名と国語科教員3名による審査・投票の結果、応募作品の中から次のように10名の入選作を決定しました。すでに1月5日の全校集会放送でもお知らせしましたが、以下にその学生の氏名と作品名を掲げ、栄誉を称えたいと思います。

また、惜しくも入選には至りませんでした。審査の過程で優れた評価を得て、最終選考に残った作品は佳作として表彰しています。その学生の氏名も併せてここに紹介します。

最優秀賞

情報工学科1年	杉谷 唯子	「良心の形成 ～『海と毒薬』を読んで～」
機械工学科2年	山田 清香	「日本の昔の教育から見えるもの ～『柳田國男の教育思想』より～」

優秀賞

機械工学科1年	末永 共助	「現代の原発問題に対する意識」
電子制御工学科1年	西尾 颯真	「希望」
物質化学工学科1年	今村 尚真	「人との繋がりとは ～『バケモノの子』を読んで～」
物質化学工学科1年	橘 優太	「続きがとても気になる推理」
電気工学科2年	秋山 莉香	「世界平和の為に ～『わたしはマララ』を読んで～」
情報工学科2年	高城 頌太	「なりたいたい色に向かって～『カラフル』を読んで～」
物質化学工学科2年	多田 佳奈枝	「誰もが抱える闇」
情報工学科3年	林 大泰	「『欲』と『お金』の真意 ～『億男』を読んで～」

また、惜しくも入選には至りませんでした。審査の過程で優れた評価を得た作品16編について佳作としました。以下に、氏名を紹介し、その努力を称えます。

佳作

1 M 樽井 颯	1 E 河合 真志	1 E 面尾 時彦	1 S 橋本 諒
1 S 伴藤 信一郎	1 I 三宅 達也	2 M 辻本 湧大	2 E 出井 秀征
2 S 川村 俊介	2 S 萬代 裕輔	2 I 杉野森 拓馬	2 C 圓城 智也
2 C 森居 拓	3 I 黒田 晃平		

《最優秀賞について》

今年度は最優秀賞が2名となりました。1年杉谷さんの作品は、遠藤周作の名作「海と毒薬」について、読後の不快感を深く掘り下げ、安易な「戦争反対」の論ではなく、その根底にある「人間の良心」に言及しています。「他人の眼や社会の罰」を評価基準とするのではなく、自らの判断で善悪を判断し行動する、というのは人として基本的なことですが、実は難しい。皆さんにも考えてほしい問題です。

2年生の山田さんの作品は、提出用の原稿用紙3枚が埋め尽くされた大作です。民俗学者として有名な柳田國男について、教育学の面から述べられた著作を題材とし、昔の教育が「聞く・話す」中心であったこと、地域での教育が見直されるべきことを論じています。少し話は逸れますが、学生の皆さんも板書やプリントがあることに満足し、「聞く」ことがおろそかになっているように思います。また、現在の日本で「子供の貧困率」の高さが問題になっているように、生活と教育は切り離せない関係にあります。親や学校だけでなく、やがては学生の皆さん一人一人も社会における「教育者」となるのだ、ということを考えさせられました。

《優秀賞について》

1年末永さんの作品は、映画にもなった話題作「天空の蜂」を取り上げ、福島第一原発が事故を起こした当時、「自分とは関係ない」と思っていた気持ちに向き合い、そこから「考えること」「自分の意見を持つ必要性」について述べています。惜しむらくは、後述するように文字数が若干少なかったことです。よいテーマを取り上げていますので、あと一步、怖がらずに「自分の意見」も述べてもらえればさらによい論となったと思います。

西尾さんは、無実の罪で27年間監獄にいた主人公の知恵と勇気についてまとめました。絶望的な状況におかれた人間は自暴自棄になって当たり前かもしれませんが、主人公の落ち着いた振る舞いや、希望を捨てずにあらゆる努力をする姿勢は読者を感動させます。親御さんとのやりとりもよいエピソードとなっています。

また、これも映画化された作品「バケモノの子」。応募作にはこの本の感想文が数編ありましたが、1年今村さんは「(精神的な)家族」の大事さから書き始め、テーマとなる「心の闇」について妄想・誤解から争いになってしまう人間の愚かさと言及します。一方、2年多田さんはタイトルの通り、まず「闇」について取り上げ、最後にその「闇」を広げてしまうのは家族＝「親」であると述べる一方で、親に責任を押しつけず、自らも「闇」に打ち勝つ努力が必要である、と結んでいます。甲乙付けがたく、この2作品は同点で入賞となりました。

次も話題作「ビブリア古書堂の事件手帖」の感想文。橘さんは推理の面白さだけでなく、物には全て物語がある、という点に注目しました。古書はもちろん、例えば図書館の本も、皆さんの先輩が手に取った物です。最新の機器もよいのですが、大掃除で出てきた意外な古い物、普段何気なく使っている身近な物などを、感謝の気持ちを持って大事に扱うことで、物も必ず応えてくれます。ぜひその気持ちを忘れないでください。

2年秋山さんの作品は、ノーベル平和賞受賞者マララさんの著作について、彼女の強さや、今の日本が恵まれた環境にあることなどの感想を素直に書いており、審査員に好印象を与えました。「恵まれたところにいる」私たちが、これからどう行動するかが問題です。また、森絵都「カラフル」もよく読まれる作品ですが、高城さんは引用を効果的に使い、あらすじも押さえ、読みやすくまとめています。前向きなよい文章ですが、「一方的」にしか見ることができない人間の弱さについても、もう少し振り返りがあれば文章に奥行きが出たと思います。

3年生からも毎年応募があります。今年度の入賞者、林さんは「大金が転がり込んだらどうするか」という、人間の永遠のテーマともいえる問題を取り上げました。「欲」という言葉を使い、お金を使うことによって幸せになる場合、欲に振り回されてお金自体も活かされない場合について考えています。

《皆さんへのアドバイス》

今回の入選作品は、いずれも1500文字近い(応募用原稿用紙の2枚目もほぼ記入されている)ものでした。審査の途中で、2枚目半ばで終わっているものに関して「あと数行書いてほしい」「もう少し考えを深めてくれれば……」という評価がしばしば聞かれました。「量より質」という言葉もありますが、本コンクールに関しては、ある程度の分量は必要だと感じています。逆に、ほとんどの応募作は「できるだけ一枚半以上」という注意書きを守ってくれており、佳作以外にも惜しい作品が多数ありました。来年度の応募に期待します。(国語科：鍵本)

